

## エミリ・ブロンテの詩

——『嵐ヶ丘』への道——

エミリ・ブロンテの小説『嵐ヶ丘』は、生と死を超えた人間の激しい情念の世界と反社会的なまでの悪魔主義によって、英文学史上に異彩を放つ作品である。そして、この作品は、人生のほとんどもをハワースの片田舎で暮し、寡黙で身内の者にすら決してその心の内を覗かせることのなかったエミリ・ブロンテが、その内面にいかに激しい情熱と願望を秘めていたかを世に示す結果となった。牧師館での単調で変化のない日常生活の中にあつて、エミリはいかにして自らの想像世界を広げ、自己の内面を掘り下げていったのだろう。この小論のねらいは、『嵐ヶ丘』において、キヤサリンとヒースクリフの霊的結合によって成就される愛へと収斂していくヴィジョンの形成過程を、エミリの詩作

村瀬順子

品の中に辿っていくことにある。

エミリ・ブロンテの詩は定本とされているハットフィールド編『エミリ・ブロンテの全詩集』<sup>①</sup>の中に断片的なものを含めて百九十三篇が残っている。それらは、エミリが個人的心情を表現していると思われる告白詩と、少女時代から晩年近くまでアンと共同で創作していたとされる散文のゴンダル物語を下敷として書かれているゴンダル詩、に分けられるが、そのどちらに属するか判断としない詩や両方が渾然一体となった詩も数多く見られる。ゴンダルの散文記録はエミリ自身によって破棄されたと言われ、その実体は明らかではないが、エミリの詩からゴンダルを再構成しようとする試みがラッチフォード、ヒンクリー、ペイデン

らを始めとして各人各様の形で行なわれている。<sup>②</sup>これらの研究は、エミリの詩をすべて個人的な経験や心情を表わしたものであるとして解釈することから生ずる誤解や憶測を正すのに役立つ反面、ゴンドル物語の中に詩を位置づけるだけでは詩の本質的な理解には至らないという点で不満を残す。なぜなら、再構成されたゴンドルの筋の流れはどれも、詩の制作順序と全く一致していないことからわかるように、エミリの頭の中には、すでにゴンドルの世界が明確な形で存在しており、その上でエミリは詩に表現したいと思う場面を自在に引き出すことができたのであり、ゴンドルの人物に仮託して、自分自身の心情を表現している場合が往々にしてあるからである。スタンフォードなどは、エミリの詩を理解する上でゴンドル物語のコンテクストはむしろ誤った解釈を生むものとして否定的な立場をとっている。<sup>③</sup>

しかしながら、エミリが人生の大半においてゴンドル物語の創作に深くかかわっていたことは決して無視することのできない事実であり、エミリの内面世界を知る上でゴンドル物語の持つ意味は大きい。政争と恋愛を扱ったゴンドル物語においてエミリが創り出そうとしたのは、愛と憎しみ、野望、裏切り、復讐、罪をめぐる苦悩と悲哀の渦巻く地上的な生々しい世界であった。日常的に極めて変化の少

ない生活を送っていたエミリは、ゴンドルにおいて波乱に富む人生を送る人物を創り出すことによって、自らの内部に掘り出されることなく眠っている感情に表現の糸口を与え、それを深化させ、拡げていった。いや、それだけでなく、ゴンドルの世界は、エミリの想像力の産物でありながら、エミリの日常的現実にとってかわる現実世界としてエミリの内面世界に君臨し、エミリの人生観をも作り上げていったように思われる。この世の中には「真の美德と真の喜びを許さない仮借なき掟」があり、「すべての人は罪を犯し、嘆き悲しみつつ、しかもなお、はるかかなたの美德の星を崇めながら見つづける運命にある」<sup>④</sup>そして、「運命に打擲されながら切りさいなまれた人間が止むを得ず笑みをつくろう。運命の女神の憎悪に忍耐で抗する為に、そして心はその間も反抗を続ける……心の平和は、ただ悲しみが麻痺しているだけであり、希望は魂が見る幻にすぎず、人生は空しくはかない労働であり、死は全ての独裁者である」<sup>⑤</sup>と語るエミリの人生に対する絶望感は、一つには、国教会の牧師で福音主義派の父と熱心なメソジストであった叔母の下での厳格な宗教教育から生じたベシミズムに起因しているかもしれないが、むしろ、ゴンドルという別の現実に生きるこの中から導き出された結論として考えた時、よ

り具体性を持つてくる。自らの欲望と運命に翻弄されるゴンダル的人物たちの苦しみや悲哀を共有する中から、エミリの人生についての思索が始まったと言つてよいだろう。

ゴンダルの世界において、〈愛〉は人間を支配する絶対的な掟である。女主人公A・G・Aの恋の奴隷となった男の一人であるフェルナンド・ド・サマラが「わたしの魂は、彼女のために美德も信仰も天国も喜んで捨て去ることが出来る」<sup>⑥</sup>と語っているように、ここには社会の一般的な道徳も宗教も介入することなく、人物たちは自らの情熱に従い、人間性をむき出しにして生きている。中でもA・G・Aは、真実の愛を求めて次々と恋をするが、愛せなくなった男性に対しては投獄したり追放したりすることも辞さないエゴイストであり、同時に徹底したロマンティストでもある。そして、そこにエミリの本質を重ね合わせて見ることが出来るだろう。しかしながら、愛にとつての最大の敵は死である。死は愛する者同士を引き裂き、生きる喜びを奪い取ってしまう。そして、時というものにしばられている人間にとつて、死は決して逃れられない掟である。エミリは『嵐ヶ丘』において、死を越えて生き続ける愛、いやむしろ、死を越えた永遠の世界において初めて成就される愛のヴィジョンを打ち出したが、死を人生の終着点として愛の限界

を嘆くにとどまっているゴンダルの世界から、死を新たな生命の出発点として捉える『嵐ヶ丘』へと飛躍するまでには、以下に述べるような長い苦闘の道のりがあった。

人間の生がすべてを絶滅させる死に向つて進んでいるとすれば、人生は救いようのないほど空しい、とエミリは考へる。

おまえが眠らねばならぬ墓を見るがよい。

おまえの最後の、最強の敵だ。

たえ、その眠りが不幸であっても、

泣かないことこそ忍耐というものだろう。<sup>⑦</sup>

死は人間にとつて敗北であり、せめて、それを堪え忍ぶことによって、運命に対する抵抗を示すしかない。が、しかし、逆に苦しみの多い人生からすれば、死は休らぎを与え、この世の苦しみを忘れさせてくれる永遠の眠りでもある。「私の唯一の願いは、死という眠りの中で忘れ去ることだ」<sup>⑧</sup>あるいはまた「どこにも休らぎの場はなかった——墓場を除いては」<sup>⑨</sup>と語る人物の心は、いずれもこの世の苦しみに満ちている。とすれば「労苦の報いが苦悩であるならば、だれが永遠の憩いを恐れようか？」<sup>⑩</sup>

エミリにとって、死は単なる観念としてあるのではなかった。肉親の相次ぐ死に加えて、日常的に行なわれる葬儀を目のあたりにし、庭を隔てて延々と広がっている陰気な墓石の群れから目をそらすことの出来ない環境にあって、死とは紛れもない現実であり、人間の行きつく果ての姿であるという認識を根づかせていったことであろう。死が意味するものはまず灰色の墓石であり、その下で腐敗していく肉体であった。例えば 次の詩行、

あの瞳は塵、あの唇は土、

あの姿は全て朽ち果ててしまった。

思考も、感覚も、脈拍も、呼吸も、

すべては死に貪り食われ、消え失せた。

今やいかに卑しいうじ虫といえども、

生きている限りはまだしも高貴なのだ。

かつて、あれほどまでに愛され崇拜された

アルフレッド王の最愛の妃よりも。<sup>⑩</sup>

あるいはまた、

土の中、土の中におまえは横たえられ、  
灰色の石ひとつが、おまえの上に立つ。  
黒い土がおまえの下に広がり、  
黒い土がおまえをおおう。

「しかし、そこには憩いがある。

早くそんな時がくればよい。

わたしの日光のように明るい髪の毛が、  
草の根とからみ合う時が。」<sup>⑪</sup>

というような詩行にも、死が不気味なほど具体的に捉えられている。

人間にとって生きるということは、生の苦しみと死への恐怖にはさまれた袋小路に立たされることだという意識を、エミリはゴンドル物語において投獄される人物たちを扱った「地下牢の詩」と呼ばれる数々の詩篇の中に表現しているが、そうした閉塞状況から脱け出す方途をエミリはまず、自然の中に求めている。ハワースの荒野は、エミリの自由への願望を満たしてくれたはずである。一四九番の詩においてエミリは、牧師館の墓地に眠る死者たちを眺めながら、「時と死と人生の苦しみ」に心を痛めている。そして、こ

の苦悩に満ちた人生から天上の世界をながめた時、天国があまりにも地上からかけ離れた世界に見え、そこに慰めを見出すことはできないと語っている。いや、むしろ地上の苦しみを知らない天上の世界には何ら興味はなく、地上において苦しむことに誇りすら抱いている。キリスト教の終末論において、人は死後、最後の審判を受け、神の国に入って永遠の生命を享受するとされているが、エミリはむしろ地上にとどまって自然と共に永生を分かち合いたいと思う。

墓の向こうにどんな世界があろうとも

わたしたちは生まれた地を去りはしない。

決して——それよりも優しいあなた(母なる大地)の

胸の上で

末永き憩いに横たわらせて下さい。

それともあなたと共に永遠の生命を

分かち合うために目覚めさせて下さい。<sup>13)</sup>

天上の世界を放棄し、地上の世界を讚美するこうした姿勢は『嵐ヶ丘』において、天国にいる夢を見たキャサリンが「地上に戻りたいと言って胸もはりさけんばかりに泣

く」<sup>14)</sup> 姿や娘のキャサリンが描く次のような地上の天国のイメージにつながっている。

まぶしい白い雲が空をちぎれとんでいる下で、西風にざわついている緑の木に登って揺られながら、雲雀だけでなく、つぐみや黒鳥や紅ひわやかっこうが周り中で調べを奏でるのを聞き、遠くには荒野が涼しそうな黒い谷間になって途切れているのが見え、近くには長く伸びた草が微風に波のようにうねっていて、森や小川のせせらぎや全世界が目覚め、喜びで狂ったようになっている。<sup>15)</sup> それが私の天国なの。

しかしながら、詩に示されている自然のイメージは、地上の天国と呼ぶような生命感あふれる自然ではなく、ましてや人間を死から救ってくれるものでもない。母なる自然は、人間の死すべき運命を悲しみ、「人間の熱心な目をしばし励まさん」として輝いてはいるものの、その奥には「深く言うに言われぬ悲しみ」をたたえた自然なのである。

エミリが影響を受けたであろうと言われているワーズワースは、「不滅性の暗示」<sup>16)</sup> という詩の中で、自然や周りのものを全てに天上の輝きと栄光を見出すことのできた幼年時

代の 'Visionary gleam' が成長と共に失なわれていくことを嘆いているが、エミリの詩にも、自然の中に無上の歓びを見出し、夢と情熱にあふれていた子供時代へのノスタルジアが随所に見られる。

ひとり、わたしはすわっていた。

夏の日には穏やかな光のうちに暮れて行った。

わたしは光が消えるのを見ていた、

霞のかかった丘や風のない谷間から次第に消えていくのを。

すると心の思いがあふれ、

わたしの胸はその力に押し潰された。

そして涙があふれ出た。

わたしには思いを語ることができなかったからだ。

あの神聖で静穏なる時間に

忍び寄ってきたあの荘厳なる歓びを。<sup>⑭</sup>

あの風がうなるのをよく聞いたものだ、

神々しいほど深い歓びを抱いて。

わたしの目には熱い涙があふれていたかもしれないが、

無上の歓喜がわたしを泣かせたのだ。

わたしは冬の夜、ひとり横たわり、

夢見ることが好きだった。

私が幼ない頃に親しんでいた、

本当のすばらしい歓びの夢を。<sup>⑮</sup>

こうして自然の中に絶対的な歓びを見出すことができた時代も、すでに過去のものとなり、死の思いにとりつかれたエミリには自然もまた死の掟から免れられない存在に見える。なぜなら、輝かしく喜びに満ちた季節のあとには必ず、全てを枯らしてしまう厳しい冬の訪れがあるからだ。

わたしたちは思った、「冬が再びめぐってきたとき

これらの輝かしいものたちはどこへ行くのだろうか？

すべては空しい幻のように消えてしまう

ばかげた夢だ。

.....

「どうして喜ばなくてはならないのか？

木の葉は緑に染まらないうちに

もう枯れ落ちるしるしが

表われているというのに。<sup>⑭</sup>

太陽は喜びに満ちて光り輝き、

小川は陽気に水音をたてている。

しかし、わたしだけが思い煩い、

全てが暗闇に見える。<sup>⑮</sup>

エミリは、自然を愛し、地上的な天国を求める一方で、自然を超えたところにあるもの、死を超越するものに激しい憧れを抱くようになる。しかし、エミリは、キリスト教信仰に安易に救いを求め、神のもとの永遠の生命に入ろうとはせず、個人的な体験を通して、また、自己の内部へと沈潜していくことによって死を超越し、永遠の生命へと導いてくれる神のヴィジョンを模索していく。

先に、エミリにとって死がいかに具体的なイメージを持っているかについて触れたが、エミリが物質界及び現象界から、その背後にある霊的な世界へと目を転じた時、死は新たな様相を呈し始める。エミリには「魂には、しばしの間、肉体を離れる自由がある」<sup>⑯</sup>と確信できるような超自然的体験がいく度となくあったようだ。それは昼間の日常的・現象的な自然が靈性を帯びた神秘的な夜に変わり、月が

太陽にとってかわる時、自然の中で啓示を受けた靈魂が肉体の束縛から逃れて飛翔する瞬間である。例えば、

生い茂ったヒースは吹きつける嵐の下に揺れ動く。

真夜中の月明り、明るく輝く星々。

暗闇と光とが喜々として融け合い、

大地は天にのぼり、天は下り、

人間の靈を侘しい地下牢から解放する。

足枷を断ち、格子を破って。<sup>⑰</sup>

と感じられたり、あるいはまた、

月の明るい風の夜に

魂を土塊どくわいの身から遠くへ運び去ることができる

目は光の世界をさすらいことができるとき

わたしはいちばん幸せだ――

わたしが消えて他に何も無く――

大地も大海も雲なき大空も消滅し――

ただ魂だけが無限の広漠をぬけて

翔けめぐるときぞ。<sup>⑱</sup>

というような解放感の中にあつて、エミリは、肉体はむしろ魂の自由を阻止する障害物であり、死は魂を肉体の牢獄から解放するものではないかと考えるようになる。『嵐ヶ丘』において、死を目前にしたエミリが次のように語る場面がある。

何よりもわたしのいちばん嫌なものは、このがたがたにこわれた牢獄なの、この肉体の牢獄に閉じ込められていることにわたしはもう飽き飽きしたわ。あの輝かしい世界へ早く逃げて行きたい、そしていつまでもそこにいたい——涙を通してぼんやり見るのではなく、痛む心の壁を通して懂れるだけでなく、その世界と一つになり、その中にいたい。<sup>②</sup>

このキャサリンの言う「輝かしい世界」とは、キャサリンがこの世において永久に失なってしまった世界——子供の頃、ヒースクリフと共に自然の懷の中で何もかも忘れて遊び惚けることのできた至福の世界——をさすであらう。その世界は、リントンの妻という社会的地位にあり、分裂した自我に苦しむキャサリンにはもはや取り戻すことはできないが、死はそれを可能にしてくれるかもしれない。時間

も空間もそして全てを超越した「あの輝かしい世界」へと回歸し、本当の自分を取り戻し、自己を全うすることができるとは思えない。

しかし、果して死はそのようなすばらしい世界をもたらしのだろうか。エミリは一七〇番の「白昼夢」(A Day-Dream)と題された詩の中で、自然の精たちが仮象の世界に生きる人間には見えない光り輝く世界が実在することを告げる場面を空想する。

「おまえにとってこの世は墓石のよう、  
砂漠の不毛な岸のように見える。  
われわれにとってこの世は想像も及ばぬ輝きを放って、  
ますます光り輝く。」

そしてもしベールを上げて  
おまえにひと目だけでも見せることができたなら  
おまえは生きているものたちのために喜ぶだろう。  
なぜなら、それらは死ぬために生きているのだから。<sup>③</sup>

無論、エミリは、これが白昼夢であり、空想が作り出す「他愛もない産物」にすぎないことがよくわかっている。



しかし、この空想 Fancy は、エミリの内部で次第に理性に對抗し得る想像力 Imagination となり、彼女の内面世界を支配するようになる。「想像力に寄せて」(To Imagination) と題された詩の中でエミリは、「外の世界はあまりにも希望がないので、内なる世界を私は一層称える」と語っている。

〈理性〉はたしかに自然の悲しい現実を見て  
しばしば苦情を言い、

苦しむ心に、その大切な夢もまた

いかに空しいものとならざるを得ないかを語る。

そして〈真実〉は咲きそめたばかりの〈空想〉の花を  
乱暴に踏みじめるかもしれない。

しかし、おまえは常にそこにおいて

さ迷う幻を連れ戻し

朽ち果てた春に新たな輝きを吹きかけ、

死からより一層美しい生命を呼び出し、

神のような声で、おまえの世界と同じくらい

光に満ちた実在の世界が存在することをささやいてく  
れる。<sup>⑤</sup>

この詩においてもエミリは、想像力がつくり出すものを「幻の至福」であると意識してはいるが、死の向こう側に「より一層美しい生命」「光に満ちた実在の世界」があると語る想像力を「恵み深い力」「人間の苦しみの確かな慰め」「明るい希望」として称えている。ここでエミリが自らの想像力を「おまえ」と客体化していること、そして、それが「神のような声で囁く」ことに注意したい。本来は自己の内部にあり、精神作用の一つにすぎないはずの想像力はエミリの中で次第に確固たる力を持つにつれて、客体化されてくる。その結果、想像力は「輝く天使」となり、「なんじ、常在の幻のもの——わが奴隸、わが友、わが王」へと、さらには「幻想の神」へと高められていく。

わたし自身の魂がわたしの祈りを認めているからには  
信仰が疑いをもつこともなく、希望が絶望することも  
ないものを

崇拜するのは間違っているだろうか？

幻想の神よ、わたしのために弁じて下さい。

わたしが何故あなたを選んだかを語って下さい。<sup>⑥</sup>

「幻想の神」とは、エミリの内なる想像力をさすと同時

に、その想像力を生み出した客観的実在としての神をもさしていると言えるだろう。自己の中に沈潜することによって、そこに神とのつながりを発見し、信仰を回復するというのは、宗教的懷疑に陥ったヴィクトリア朝の知識人たちがしばしば辿ったプロセスである。エミリの場合、想像力こそが、彼女の心の光であり、彼女と神を結びつける導き手になったと言えるだろう。

奥深く——わが魂のうちに隠れ、

その光は人々の目には見えない所にあり、

しかも消されることなく輝く——闇が

陰うつな巢窟のあたりに押し寄せても

その優しい光を抑えることはできない<sup>⑧</sup>。

しかしながら、エミリが想像力は「わが王」であると同時に「わが奴隸」であると語っているように、想像力はエミリ自身が「制御」(control)し、あるいはまた「反抗」(rebel)することによって常にエミリの手中におさめておくことができるような主観的かつ個人的な性格をもっている。従って、その想像力がつくり出した神は、エミリの主観的願望が形象化されたものに他ならない。にもかかわらず、エミ

リはいわば強引にその神の存在を信じようとする。そのプロセスは『嵐ヶ丘』において十八年間にわたってキャサリンの霊に憧れ続けたヒースクリフの中に投影されている。

わたしはたった一つの願いをもっていてわたしの全存在、全能力は、その願いを達成することを常に願っている。これだけ長い間、一途にそれだけをあがき求めてきたのだから、わたしはその願いが——しかも、まもなく——かなえられるだろうと確信している。なぜなら、その願望はわたしの存在を食い滅し、その願望達成の予感のうちにわたしは呑み込まれてしまっているからだ<sup>⑨</sup>(傍点筆者)

と彼はネリーに語る。そして彼が遂に寝食もままならない状態でキャサリンの霊を見つめる場面と重ね合せて、わたしたちは次の詩に表現されたエミリ自身の神秘体験を読むことができる。

まず平和のしじま、音なき静けさが降りきたる。

苦悩のあがき、激しい焦燥が止む。

沈黙の音楽——夢想も及ばぬ、えも言われぬ調和がわたしの胸を慰め、大地は失せ果てた。

その時、姿なき者は姿を現わし、見えざる者が真実を頭わす。

わが外なる感覚は消え失せ、内なる精髓は感ずる——その翼はほとんど自由に、その安らいの家、その憩の港を見出す

それは深淵を測り、身をこごめ、最後の飛躍をあえてこころみる／

ああ、その阻止の恐ろしいこと——その苦悶の強烈なこと

耳が聞こえ、眼が見え始める時。

脈拍が鼓動し、頭脳が思索し始め、

霊が肉体を感じ、肉体が抱束を感じ始めるとき／

それでもわたしは激痛を失なうまい、拷問の苦しみを軽減しようと思うまい。

その苦悶が責めたてればそれだけ早く、それは祝福するであらう。

地獄の火に包まれ、あるいは天国の光輝に輝きながら、たとえ死の前触れにすぎないとしても、その姿は神聖なものである。<sup>④</sup>

この「姿なきもの」「見えざるもの」こそが、エミリが霊の力によってとらえた神の姿であり、ここにはロマン主義的な愛死のイメージと自由への願望、回帰願望の全てが満たされた時の法悦感が表現されている。しかしながら、ヒースクリフが「昨夜、わたしは地獄の入口に立っていた。今日はわたしの天国の見えるところにいる」と語るように、神との合一は魂が肉体の牢獄につながれている限り、今にも達成されそうな正にその瞬間に現実引き戻されるという「天国」と「地獄」の両面を合わせもつものである。しかし、肉体が拷問の苦しみを感じれば感じるほど、それは彼女の望む神の实在の証しとなる。その激痛を和らげるのではなく、むしろそれを甘んじて受けることによって魂の至福を得ることができるとエミリは信じていたようだ。そして、それは結核に冒されながらも決して医者にかからうとせず、日常の家事の手を休めることすらしなかったエミリの異常とも思える姿勢の謎を説き明かしてくれるようにも思われる。

このようにして、エミリの信仰を高らかに歌いあげた次の詩が生まれてくる。

わたしの魂は怯懦ではない

世の嵐に悩む領域で震え戦く者でもない  
わたしには見える、天の栄光の輝くのが  
信仰も同じく恐怖からわたしを守って輝く

おお、わが胸の内なる神

全能にして永遠に在ます神

不死の命なるこのわたしが、あなたのうちに力を得る  
とき

わたしのうちに安らい給う命の神

人々の心を動かす数々の教義も

口には言い難いほど空しい、

枯草や際限のない大海原の

はかない泡沫のごとく無価値だ

あなたの無限にすっかり取りすがり

不滅の不動なる岩へ

いとも確実に錨を下ろした者の

心のうちに疑いを目覚めさせるには

広く抱擁する愛をもって

あなたの靈魂は永遠の年月に生命を与え

天上に遍在し、立ちこめ、

変化し、支え、溶かし、創造し、養う

地と月が消え果て

太陽と宇宙が存在しなくなっても

あなたがひとり残っていれば

あらゆる存在はあなたの中に存在するだろう

そこには死のつけ入る余地はなく

その力が無となし得る原子もない

あなたは実在、息吹であり

あなたの実質は決して破壊されはしないのだから。<sup>②</sup>

この詩は、死を超越し、不滅の生命をもたらす神の実在を確信したエミリの喜びの歌であるが、ここに表現されている神は、もちろん既存の体制化されたキリスト教やその教義からは離れているが、本質的にはキリスト教における万物の創造主としての唯一絶対の神と変わらないという印象を与える。ところが、この詩の前後に書き始められたであろう『嵐ヶ丘』において、この「わが胸の内なる神」の定

義が、キャサリンのヒースクリフに対する愛の告白という形をとって表わされる時、それは全く違った意味を持ち始める。キャサリンは言う。

確かに誰でも、自分を越えたところの自分の存在があるし、また、あるべきだという考えを持っているはずだわ。……たとえ他のすべてのものが減びても、彼が残っていれば、わたしはまだ生きていける。でももし、他の全てのものが残っていて彼がいなくなったとしたら宇宙はわたしとは全く縁のないものになってしまう。わたしはその一部ではないという気がするでしょう。……わたしのヒースクリフに対する愛は地底の永遠の巖に似て、目には見えなくともなくてはならない喜びなのです。<sup>④</sup>

エミリの到達した神のヴィジョンは『嵐ヶ丘』において、キャサリンとヒースクリフの愛のヴィジョンへとみごとに変貌する。先に示したエミリの神秘体験は、エミリの神への願望が強烈なロマン主義的愛への願望にいかに近いものであるかを如実に物語っているが、神をキャサリンとヒースクリフという生身の人間同士の中に具象化したことで、

エミリは正統のキリスト教から完全に訣別したと言えるだろう。『嵐ヶ丘』は、エミリの求めるものが、天上的な神の愛ではなく、いかに人間的な性質をもったものであるか、また、それでいて、いかに人間性を越える境地を、そして、人間としては不可能な絶対性を目指しているかを示しているからだ。それは神に対する挑戦であり、反逆に他ならない。

陰気な儀式によって彼らは至福を勝ち取る——  
懺悔と断食と恐怖によって。

わたしの儀式は唯一つ、優しき口づけ、  
懺悔は唯一つ、優しき涙。

いつまでもこうして  
崇めていられますように。

すべての永遠なるものが

わたしに楽園を作ってくれますように。

わたしの愛の楽園を——他には何もありません。<sup>⑤</sup>

エミリにとっての神が万人のための神ではなく、想像力という非常に主観的なものを仲介物として達せられた個人的な独自の神であることはすでに見てきたが、エミリは

『嵐ヶ丘』において、自らの神のヴィジョンを「自分を越えたところにある自分」としてのヒースクリフの中に、あるいはキャサリンの中に対象化し実現しようとした。小説は虚構であり、想像の産物にすぎない。しかし、その想像の世界が、エミリにとっては現実の世界以上に生きること深く係わっていたことを考えた時、ヒースクリフの死と酷似した状況のもとで死んでいったエミリもまた、自らの神との合一を自らの意志によって実現しようとしたと考えることもあながちいたずらな空想とは言えないだろう。

さらにつけ加えるならば、実人生においてついに恋愛を体験することのなかったエミリが、その愛の対象としての神を「自分を越えたところにある自分の存在」と呼んだ時、エミリは自己の完成された分身をその神の中に求めていたのかもしれない。キリスト教の神は、神の姿に似せて人間を造り給うた。それに対してエミリは、自らの人格の延長線上に神を思い描いていたのかもしれない。とすれば、晩年において「エミリは絶対者の位置を客観的なものから主観的なものへと移した。彼女自身が自らの絶対者になったのだ。」とするスパークの意見も極論とは言えないだろう。そして、敬虔なクリスチャンであり、忍従の生涯を送った妹のアンにとって、エミリの一見、非常にストイックに見

える死に様の中に潜むそうした傲慢さを決して容認できなかったであろうことも想像に難くない。いずれにせよ、自らの作品世界の中に孤独な魂を燃焼させたエミリにとって、ヒースクリフを地で行くような死に方はいかにもふさわしい。そして、小説は虚構であるという意識から決していることのできない現代の読者にとっては、それが決して虚構ではないことを自らの死によって証明しようとしたエミリは、実に新鮮な魅力を持っていると言えるだろう。

# 註

① C. W. Hatfield (ed.), *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* (New York, Columbia University Press, 1941) 本稿における詩の引用はすべてこの版に依る。

② F. E. Ratchford, *Gondal's Queen: A Novel in Verse by Emily Jane Brontë* (Austin, University of Texas Press, 1955); Laura L. Hinckley, *The Brontës: Charlotte and Emily* (New York, 1945); William D. Paden, *An Investigation of Gondal* (New York, Bookman Associates, 1958) 等を参照。

③ Muriel Spark and Derek Stanford, *Emily Brontë: Her Life and Work* (London, Peter Owen, 1953) Part II 参照。

④ No. 112, ll. 17-8, ll. 25-8.

⑤ No. 157, ll. 29-32, ll. 37-40.

- ⑥ No. 133, ll. 71-2.
- ⑦ No. 155, ll. 41-4.
- ⑧ No. 34, ll. 23-4.
- ⑨ No. 58, l. 4.
- ⑩ No. 167, ll. 15-6.
- ⑪ No. 154, ll. 84-91.
- ⑫ No. 163, ll. 1-8.
- ⑬ No. 149, ll. 42-6.
- ⑭ Emily Brontë, *Wuthering Heights*, Norton Critical Editions (New York, 1972) p. 72.
- ⑮ Ibid., pp. 198-9.
- ⑯ William Wordsworth, 'Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood',
- ⑰ No. 27, ll. 1-10.
- ⑱ No. 127, ll. 1-8.
- ⑲ No. 170, ll. 25-8, ll. 33-6.
- ⑳ No. 101, ll. 5-8.

- ㉑ No. 102, ll. 11-2.
- ㉒ No. 5, ll. 1-6.
- ㉓ No. 44.
- ㉔ *Wuthering Heights*, p. 134.
- ㉕ No. 170, ll. 61-8.
- ㉖ No. 174, ll. 7-8, ll. 19-30.
- ㉗ No. 176, ll. 36-40.
- ㉘ No. 168, ll. 6-10.
- ㉙ *Wuthering Heights*, p. 256.
- ㉚ No. 190, ll. 77-92.
- ㉛ *Wuthering Heights*, p. 259.
- ㉜ No. 191.
- ㉝ この詩の日付けは一八四六年一月二日となっており、エミ  
リは題へじつこの年の七月には『嵐ヶ丘』を書き終えていた。
- ㉞ *Wuthering Heights*, pp. 73-4.
- ㉟ No. 137, ll. 38-46.
- ㊱ Muriel Spark and Derek Stanford: op. cit., p. 95